

カール・ファイリップ・モーリッツの美學

藤 田 貞 次

美學史の一つの主なる課題が美もしくは藝術の特殊性の——従つてまた美的自律性の——史的攻究にあるならば、この領域をそれ自身特性づけると共にこれを他の領域から區別する概念として、模倣ならびに技術のこの一列の概念は、その對照的なる創造および天才の兩概念と相並んで、ともに美學史家にとつての不斷の關心の中心でなければならぬ。さうして美學史の上でこれらの概念は互に他の系列の概念の粗笨なるもの或ひは極端なるものがしばしば藝術の名を僭稱することの故にその完全なるもの或ひは中正なるものまでも互に貶黜せしめようとする傾きがしばしばあるから

して、ひとは一方のものゝ專制の監視を怠つてはならぬと共に、他方の蔽はれたるものゝ救済に努めなくてはならない。かうした關心からして、ひとが自然見逃しやすきまたは當然見逃すべきものをも繰りかへし見直して見ることが許されるであらう。カール・ファイリップ・モーリッツ(Karl Philipp Moritz)は恰もこの見逃し終るに惜しいところのものを持つてゐるかに思はれる。モーリッツの著書のうちに見えてゐる少くとも或る一つの言説の如きは、明かに美的自律性の問題に關してバウムガルテン以來彼に至るまでの傳統的美學に一つの進歩せる新しき概念をもたらし來れるものと見なすに足るとすら考へられうるところのものを含んで

ゐ、またカントの「判斷力批判」の現れる二年前即ち一七八八年（九月）に發表された彼の主論文“Ueber die bildende Nachahmung des Schönen”および同じく五年前の一七八五年に發表された小論文“Versuch einer Vereinigung aller schönen Künste und Wissenschaften unter dem Begriff des in sich selbst Vollendeten”の中にはカントの無關心論に相當するかとも解せられうるところのものが包含されてゐる。これらの點はモーリッツがカントは勿論ヘルダーやゲーテ、シルラーとはゞ時代を同じうしてゐる點と併せて最もわれわれの興味を惹く所以のものである。

モーリッツの著書は上述のものゝ外に、“Reise eines Deutschen in England im Jahre 1782”、“Versuch einer Deutschen Prosodie”彼の自叙傳小説“Anton Reiser”、“Ueber ein Gemälde von Goethe”（1792）ならびに彼の死後出版者マウラーによ

つて發表された遺稿“Bestimmung des Zweckes einer Theorie der schönen Künste”（Berlinischen Archiv der Zeit und ihres Geschmacks. 1795.）などがある。

これらの著作は、ジグムント・アウヘルマン Sigmund Auerbach: Vorrede zum Neudruck der Abhandlung, “Ueber die bildende Nachahmung des Schönen” 1888によれば、當時獨逸の到る所で讀まれ且つ賞讃された。就中彼が二年間の伊太利滞在の結果としてひとびとの豫期せるこの旅行の目的——諸々の古蹟についての仕事や興味ある旅行記、伊太利文學及び伊太利文法學についての攻究にあつた——を裏切つて發表した小論文「美の形成的模倣について」は、却つて一般のひとびとの注意にのぼり、あらゆる雜誌で評價された。それらの評價のうち、ヘルダーとクネーベルとはモーリッツをゲーテ的藝術觀の説明者と見なした。ヘル

ダーは彼の妻宛の一七八九年二月二十一日附書翰において言ふ、「この論文は徹頭徹尾ゲーテ的である、その魂からその魂において aus seiner Seele in seine Seele。彼〔ゲーテ〕は人の好いモーリッツの全思想の神様である」。ゲーテは一七八九年七月ヴイーラントの『Deutscher Merkur』においてモーリッツの深さ及び鋭さについて判断を下し、注目すべき言葉を付け加へる、「彼はこの論文を羅馬において、自然と藝術がもたらした幾多の美しきものの近くにおいて書いた、彼はいはゞ藝術家の魂からさうして魂におぼつて aus der Seele und in die Seele des Künstlers 書きた」。Die Allgemeine Literaturzeitung の批評家レーヘルク Reibergは一七八九年五月二十二日附の同紙上でその諸觀念の豊富さや叙述の魅力を褒めて言ふ、「天才と趣味とのこの完全な調和及び趣味についての二三の考察は最も生き生きとした最も深い感覺によつてな

れたものである」。また同年四月十八日の Gröninger

gelehrten Anzeigen における批評はこの書を推薦

して言ふ、「蓋し實際ひとはどの頁においても、諸

觀念の最も幽かなヌアンツエすらも精察し且つそ

れらの最も精緻な區別に突き入つてゐる著者の才

能を驚嘆すべき機會を見出すからである」。シルラ

ーは彼のこの論文を初めて一七八九年に讀んだ、

その際著者から直接その内容についてすでに聞いて

てゐたが故にざつと目を通して、「モーリッツは固

定せる言葉を持つてゐないからして、理解に困難

である、また哲學的抽象の道途において比喩的言

語が混入し、加ふるに個々の概念も異解されたる

言葉と結びついてゐる。思想は壓縮されて、あま

りにも壓縮されてゐるからして、註解がなくては

は理解されえないであらう。彼は夢想に囚はれて

ゐ、ヘルダー的思想がそのなかに明かにある。私

及びあらゆる文學者にとつてその中で氣に入らぬ

に相違ないところの點は、美の國からの作品が一つの完成されたる圓き全體であらねばならぬ、といふ度を過ぎたる主張である。この圓に唯一の半徑が缺けたならば、圓は無用なるもの *Unnütze* の下に沈下するだらう」と判断した——この抗議的判断と、ハイデンライヒ *Heydenreich: System der Aesthetik* がカントの批判主義の武器を振りかざして「何所から一體モリッツ氏は、自然が藝術の諸天才にその創造力に對する感覺を彼等自身のうちに與へた、といふことを知るのであるか？云々」とモリッツの論文を夢想がなしたる形而上的なるものにすぎぬとなす非難とが興味ある一致を示すことに注意せよ——と言はれる。しかしこの判断をシルラーはモリッツの論文を精讀した時そのまゝに放置しておくことができず、二月二十五日モリッツを尊敬せる——しかしヘルダーの再三の忠言により後にその尊敬のうすらぎた

る——ヘルダー夫人カロリーネに宛て、「モリッツと親しく交際してゐるクネーベルは、彼の意味する所をまだ理解してゐない。この書にまだ十分習熟してゐない私は、モリッツとの談話からなほ記憶に残つてゐる解決を、近い内に彼に與へねばならない。私はこの書をケルナーに送つた、ケルナーの言ふ所が聞きたい。藝術批評は實は私の友人ケルナーにとつて眞の専門なのだ。この書が彼に満足を與へるに相違ないと私は思ふ」と書き送つてゐる。即ちシルラーはすでに二月二日附にてケルナー宛に「モリッツはその素材を鋭く掘み深く捉へる所の深き思想家である。且つまた彼は實に高貴な人間だ。さうして知己の間に非常に奇妙な興味をもたれてゐる」と書き知らせ、これに對しケルナーは三月四日シルラーに宛て「私はモリッツの書物を讀んだが、私には實質ある内容をもつてゐるかに思はれる。敘述はいくらか無

味乾燥だ。これについてはなほとくと考へさせてくれ、恐らく二三注意することができよう」と答へてゐる。なほシルラーはその後美學についての講義にモーリッツの體系を講義したと言はれる。

のみならず、モーリッツの論文はシルラーが學びえた最初の美學の體系であつたが故に、カントの「判断力批判」とともにこの論文がシルラーの美學の仕事に影響する所が甚だ多かつたと言はれる。

シルラーみづから彼の詩 "Die Künstler" 1789.

とモーリッツのこの論文との關係について後者が「藝術家にとりわけ幸多き影響をもつた」とさへ書いてゐる。しかしこの影響はあまり高く値ぶみされてはならない。なせなら、たとひ兩者の主意が如何やうに似通つてゐようとも、この詩のプラン並びに大部分は、——後に多少推敲的に變更されたとはいひながら——、彼が形成的模倣についての論文を讀んだ時には、すでに完成されてゐたの

だからである。しかし、さうであるからといつて、要する所、シルラーがモーリッツに深き關心をもつてゐたことには變りはない。

二

以上のやうに彼の形成的模倣についての論文はその發表當時毀譽褒貶相半ばしながらもいたくひとびとの注意にのぼつたにも拘らず、その後遂に全くひとびとの注意から離れるに至つた。美學者としてのモーリッツが見出したこの不運なる且つ比較的不當なる評價——默殺——の理由の一つは、この論文の出版者ヨハヒム・ハインリヒ・カムペが満足すべき出版的效果を得られなかつた點にある。カムペは一七八八年十二月三日附書翰においてモーリッツに「美についての貴下の論文は何等の幸福をも齎さなかつた、小生はこの版の大部分を反古にしてしまはねばならぬであらう」と書き脅したが、その後間もなく兩人は不和に陥り、

事實その大部分を反古にしてしまつたと言はれるその後ゲーテが「伊太利紀行」を書きつゝこの書に再び注意を向けた時には、この書はすでに全く書店から姿を消してゐ、それゆゑにゲーテは、この書の一部分をその「伊太利紀行」に挿入することをよいことゝ考へ、「恐らくひとはこゝからこの全體を再び印刷に附すべき機縁をもつたらう」と注意を興へたのである。しかしそれにも拘らず、遂にこの注意も顧みられずして空しく過ぎたが、この書の成立後恰も百年にして初めて再び世に出るに至つた。ヘルンハルト・ゾイフェルト Bernhard Souffort の發行に係る „Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts“ 集中のシグムント・アウエルバッツハ編輯の一八八八年の新版がそれである。理由の二つは、ヘルダーやクネーベルの非難があつたやうに、美學における彼のゲーテへの依存性が事實あつたよりもより過大にひとびとに

よつて考へられた、といふところにある。シルラーからヘルダー的思想——たとひ彼の念の入らざる判断に基くとはいひながら——と言はれたモーリッツの美についての考へが、ヘルダーから却つて——われわれにとつてまことに興味深くも——畢竟ゲーテ的藝術觀の説明者にすぎぬと蔑視されたのである。否、ゲーテみづから後年に至つて形成的模倣についての論文に對するおのが影響を過度に評價してゐるかに見える、すなはち「この論文はわれわれの談話からもたらされた、それをモーリッツは彼の仕方を利用して形成したのである」とこの論文について言つてゐる。しかし一七八六年冬羅馬において初めて兩人が知り合つてから互に親交を結び共鳴を感じたからといつて、このゲーテの言葉のやうな過度の評価が許される理由は毫も存しない。なせなら、もともとゲーテみづからすでに Teutscher Merkur においてモーリッツの

論文を批評した時、この論文にはモリーリッツの既に年來抱いてゐた體系が叙述されてゐる、といふことを知らなかつたのではないからである。のみならず事實、この論文における見解の著しき部分には、モリーリッツがゲーテと知る以前の「一七八五年に發表された小論文——メンデルスゾーンに捧げられたる——」においてすでに明かにしてゐるところのものであるからである。しかしモリーリッツが青春時代にゲーテの「ウエルテル」を繰りかへし讀むことによつて藝術の天才の諸條件と諸特徴とをゲーテにおいて學び且つ認めたといふことは、否定さるべきではない。従つてゲーテが彼のこの論文にその成立よりも遙かに以前から影響してゐた、といふことは言はば言はれうるであらう。その限りに於いてヘルダーの「徹頭徹尾ゲーテ的である」といふ言葉は正當でありうる。畢竟アウエルバツハが至當にも指摘するやうに、ゲーテは形

カール・フリーリッツ・モリーリッツの美學

成的模倣の論文の成立にあつて藝術家として關與した、決して思想家としてではなかつたのである。さらになほ極言するならば、モリーリッツはその人格的特性において、ゲーテみづからが呼んでゐるやうに、ゲーテの「雙生兒」なのである。従つて、彼はその人格においてむしろ「徹頭徹尾、ゲーテ」なのである、と言ひえよう。それのみか彼は伊太利において、ゲーテが歸納的に感受したところのもの、恰もゲーテに對するシルラーのやうに、解明し且つ思辨的に根據づけることができた、従つてまさにこのことからして美學的なるものに關する限りモリーリッツは受けるよりも却つて與へることの方が多かつたのである。このことをゲーテは明かに、アウエルバツハに從へば、*Tagebuch an Frau von Stein* において言表してゐる、即ち「ひとり藝術感覺ばかりでなく、道徳的な大きな變化を受けてゐる。ティッシュユバインとモリーリッツは

私を非常に助けてゐてくれるが、そのことを彼等
は知らない、こゝでも黙り家は黙つてゐるから」。
なほまた、獨逸における音節の韻律的差異は量に
よつてではなく、却つて品詞の意味によつて測ら
るべきである、といふ彼の「獨逸詩韻學論」におけ
る革新的思想が、特にゲーテの利用によつて文學
史的意義を有することは、周知の通りである。こ
れらのことは彼のゲーテへの依存性ではなく、却
つてゲーテの彼への依存性をすら物語るに足るも
のであると思はれる。以上によつて、第二の理由
がモーリッツにとつて不當なる理由であることが
明かになつたと言ひうるであらう。

しかし、このやうな理由からして彼の諸論文が
多くの美學史家から殆ど顧みられなかつたにも拘
らず、アウエルバツハの指摘に従へば、コーベル
シュタイン Koberstein と ラース Ernst Laas とだけ
はモーリッツの論文について批評してゐる。しか

しなほこのほかに、私の狭い知識の範圍では、一
八八七年にザイルタイ Wilhelm Dilthey が、Die
Einbildungskraft des Dichters “ にまつて、一八八
九年にザンナー Max Dessoir が、Karl Philipp
Moritz als Aesthetiker “ にまつて、近くはエンズベ
ルス C. Enders が、Friedrich Schlegel “ 1913 にまつ
て、クライス Friedrich Kreis が、Die Autonomie
des Aesthetischen in der neueren Philosophie “
1922. においてそれぞれモーリッツに觸れてゐる。
しかしデツンアーの論文以外のものは、單にこと
の序でにモーリッツに言及してゐるにすぎない。
美學史の一つの落丁たるモーリッツを深き關心か
ら論じつくしたのは、實にただデツンアーのみな
のである。デツンアーにおいてはモーリッツは如
何に輪廓づけられ如何に評價せられてゐるか。さ
うしてモーリッツの論文そのものは如何なるもの
であるか。(未完)